

第8回医用原子力技術研究振興財団講演会 —一人にやさしい放射線医療— 印象記

綿貫 宏樹
Watanuki Hiroki

1. はじめに

2011年12月3日(土)、鹿児島市にある鹿児島県医師会館にて(財)医用原子力技術研究振興財団が主催する講演会が開催された。本講演会は、「人にやさしい放射線医療」をテーマに、一般の方々に放射線の医療分野への貢献が身近なものであることを分かりやすく紹介すること等を目的として、毎年1回、全国各地で開催されている。第8回目となる今回は、約300名の参加者が会場を埋めた。

今回の講演会は3部構成となっており、第1部が「がん検診とPET診断」、第2部が「放射線治療：最近の進歩」、第3部が「体にやさしい粒子線治療」をそれぞれテーマとし、全6件の講演が行われた。以下に、その概要を述べる。

2. 第1部「がん検診とPET診断」

第1部では、まず瀬戸山史郎氏(鹿児島県医師会常任理事、鹿児島県民総合保健センター参加)から「がん検診のすすめ」と題して講演がなされた。瀬戸山氏は、がん罹患数が約69万人(2005年)(男性約40万人、女性約29万人)にも上るといふ我が国の現状を説明された上で、がんを早期発見、早期治療するためにがん検診が非常に重要であることを指摘された。例として示された子宮頸癌検診の受診率が、米国では85%、英国では75%にも上るのに対し、我が国では20%程度でしかないとの指摘は非常に衝撃的であった。受診率が高い国々では死亡率が低下してきている一方、我が国では低下が見られないとのことで、検診の重要性を改め

て認識することができた。

続いて、山口慶一郎氏(仙台厚生病院院長補佐兼先端画像医学センター長)から「PET検査の仕組みとPETがん検診」という演題で講演がなされた。山口氏は本題に入る前に、放射線についての基礎的な説明をなされた。東京電力(株)福島第一原子力発電所事故以降、医療における放射線の使用についても不安を抱く患者が多く、場合によっては必要な治療を受けられないといった事態が生じているとのことである。そういう意味でも、本講演会のような機会を通じて、一般の方々にも正確に放射線について理解いただくことは非常に重要であると感じた。本題のPETについては、その担う役割の重要性に加えて弱点にも言及され、PETと内視鏡等ほかの検診方法と組み合わせることにより、よりがん発見率を高めることができると指摘された。

3. 第2部「放射線治療：最近の進歩」

第2部では、まず中村和正氏(九州大学大学院医学研究院臨床放射線科学准教授)より、「放射線治療の進歩と高精度放射線治療」というテーマで、放射線治療の進歩の歴史が分かりやすく解説された。中村氏は、放射線治療の発展の歴史は、“がん細胞への照射集中”、“抗がん剤等の併用による腫瘍の放射線感受性高度化”の方向に進んできたと指摘され、特に前者については、近年、強度変調放射線治療(IMRT)や画像誘導放射線治療(IGRT)の普及により、照射の正確性が非常に高まってきていることを

紹介された。より人に優しい治療法とするために、放射線治療装置の研究開発が弛まず積み重ねられてきたことを実感することができた。

続いて徳丸直郎氏（佐賀大学医学部重粒子線がん治療学講座教授）の講演は、「小線源治療」がテーマであった。小線源治療は手術的な操作を要するため、治療医にそのための技術が必要である一方、放射線を病変部に集めやすく、また呼吸など臓器の動きを考慮する必要がないという大きなメリットがあることを指摘された。その上で、具体的な治療例を幾つも紹介され、一般の方にもとても分かりやすい説明となっていた。

4. 第3部「体にやさしい粒子線治療」

最後の第3部では、近年注目を浴びている粒子線治療がテーマとして取り上げられた。まず鎌田正氏（放射線医学総合研究所重粒子医科学センター長）より、「重粒子線治療の新たな展開」について講演があった。これまで重粒子線治療は、その普及拡大を目的として装置の低コスト化、小型化といった面が重要な課題として研究開発されてきた。しかし、それも一段落し、近年ではより先進的な次世代重粒子線治療装置が開発されているとのことであった。具体的には、治療部位を塗りつぶすように照射して治療するスキニング照射や、より自由度が高く効率的な治療を可能とする回転ガントリーの開発が進められており、これらの実現により、更に人に優しく効率的な治療が可能になるとのことであった。既に放射線医学総合研究所では、これらの実現に向けた計画が進められているとのこと、完成が非常に楽しみである。

続いて、菱川良夫氏（メディポリス医学研究財団がん粒子線治療研究センター長）より、「陽子線治療：やさしいがん治療」という演題で講演があった。菱川氏は、かつて兵庫県立粒子線医療センターの院長を務めておられ、現在は鹿児島県指宿市に開設されたメディポリス医学研究財団がん粒子線治療研究センター長を務めておられる。講演では、「幸せな医療を提供する」という「メディポリス指宿」のコンセプトが強調された。すなわち、「がん」という、患者だ

けでなくその家族にとっても辛い病気の治療に当たり、リゾート地である指宿市で、患者と家族とが一緒に滞在して励まし合いながら治療する。それにより、たとえ治らなかったとしても、良かったと喜んでもらえる医療を目指しているということである。正に“人にやさしい放射線医療”を追求した施設といえ、画期的である。“メディポリス指宿”は2011年4月より先進医療施設の認定を受けて治療を開始したとのことであるが、是非、これが成功例となり、全国にこのような施設が増えていくことを期待している。

5. 所感

筆者はここ数年、継続して本講演会に出席している。例年、非常に多くの一般の方々が参加されており、一般の方々に放射線医療について理解をしていただく機会として、本講演会の果たしている役割は非常に大きいと認識している。それに加え、今回は東日本大震災に伴う東京電力(株)福島第一原子力発電所事故が発生した後の、放射線に対する不安が社会的に高まっている中での開催ということで、その意義は例年にも増して大きなものであったと思う。是非、来年以降も引き続きこのような講演会が継続され、がん患者とその家族だけでなく、広く一般の方々に放射線医療の有用性について理解を深めていただくことに貢献されることを期待している。

なお、今年度の講演会では、例年に比して一般の方々からの質問に答える時間が少なかったように感じられた。私自身も経験があるが、がん患者とその家族は、薬にもすがりたいで様々な治療法について情報を収集している。本講演会でも、専門家の先生に聞きたいことを山ほど抱えて参加された方もいらっしゃると思う。そのような方々のためにも、是非、来年度以降は、より多くの方の質問に答えられる仕組みを作っていただければと思う。

末筆ながら、今後の放射線医療の更なる発展を祈念し、筆をおきたい。

（日本電機工業会 原子力部）